

## 『学び合い』実践者の授業内における「気になる子」に関する研究 —実践者と非実践者を比較して—

教育実践高度化専攻  
教育実践リーダーコース  
佐々木 護

### I. 問題の所在

文部科学省(2012)<sup>1)</sup>は、共生社会の形成に向けインクルーシブ教育システムの構築を目指し、障害があることにより、通常の学級における指導だけでその能力を十分に伸ばすことが困難な子どもたち一人一人の障害の種類・程度等に応じ、特別な配慮の下、特別支援学校や小学校・中学校の特別支援学級、あるいは「通級による指導」における特別支援教育の充実を図っている。現状として<sup>2)</sup>、特別支援学校に在籍、特別支援学級に在籍、通級している児童生徒は増加傾向にあり、義務教育段階において占める割合は約2.7%である。医師による診断を受けていないが「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」<sup>3)</sup>では、知的発達の遅れはないが、学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒が通常学級に6.5%在籍していることが報告されている。会沢ら(2008)<sup>4)</sup>、國分ら(2003)<sup>5)</sup>は、上記のような児童生徒、またはその傾向にある生徒を「気になる子」とし、その実態に分け、具体的手立てをその実態毎に述べているが、その多くが教師からその当該児童生徒への関わり方である。

一方、西川(2016)<sup>6)</sup>が提唱する『学び合い』では、「気になる子」の実態に応じてその子個人への手立てを講じるのではなく、教師は「子ども集団は有能である」との考えから子ども集団に働きかけ課題解決を図る。西川(2008)<sup>7)</sup>、(2015)<sup>8)</sup>では、通級による指導を受けている

児童、特別支援学級の児童生徒らを「気になる子」と定義し、教師が子ども集団へ働きかけることで教師及び介助員の指示なしに他の児童と関わり問題解決に至るということを明らかにしている。また西川(2008)<sup>9)</sup>教師が学習面・行動面において著しい困難を実感している児童生徒を「気になる子」と定義し、教師が子ども集団に働きかけることで自ら学習意欲を表明して友人達との学習の輪に入っていくことを明らかにした。三崎(2012)<sup>10)</sup>では、一斉授業において立ち歩いたり、突っ伏したりしている授業に関心のない児童を「気になる子」と定義し、教師が子ども集団へ働きかけ、学習意欲の向上やテストの成績が向上したことを明らかにした。

以上のように先行研究では「気になる子」を定義し、教師が子ども集団に働きかけることの有効性を明らかにしている。しかし、実際の『学び合い』実践者が「気になる子」をどのように捉え、どのような手立てを講じているかは明らかになっていない。また非実践者との違いについても明らかになっていない。

本研究における「気になる子」は、障害の有無に関係なく教員自身の感じている気になる子とする。

### II. 研究の目的・方法

#### (1) 目的

本研究では、『学び合い』実践者と非実践者の授業内における「気になる子」、手立てに違いがあるかを明らかにすることを目的とする。

## (2) 研究対象

『学び合い』実践教員, 『学び合い』非実践教員で質問紙調査の回答があった計 86 名を対象とした。

(3) 調査時期 2016 年 11 月～12 月

## (4) 調査手続き

調査は, 公立学校における『学び合』の実践者と非実践者に対する質問紙法によって実施した。

表 1 調査項目

- |   |
|---|
| (1) あなたの学校にどんな気になる子がありますか。(授業内)         |
| (2) 気になる子に対して具体的にどのような手立てを講じていますか。(授業内) |

## (5) 分析方法

[分析 1] 「気になる子」の実態

表 1 「『気になる子』について (1)」の調査項目についての記述を意味ごとに分割し, カテゴリーを作成し, 分類, 比較した。

[分析 2] 「気になる子」への手立ての実態

(1) 質問紙調査

表 1 「『気になる子』について (2)」についても分析 1 (1) と同様に行った。

(2) 『学び合い』実践者へインタビュー

『学び合い』実践者の「気になる子」への手立て, 子どもの有能性を実感している発話を質的に分析する

## III. 結果と考察

[分析 1] 『学び合い』の実践の有無に関わらず授業内における「気になる子」は「授業からの逸脱」に分類される児童生徒を特に多く挙げるが, 『学び合い』実践者は非実践者に比べ, 『学び合い』は学習者の相互関係を重視する実践のため「関わり」に分類される児童生徒を多く挙げる事が明らかになった。

[分析 2] 『学び合い』実践者は, 非実践者に比べ「気になる子」への手立てとして「周辺への働きかけ」を特に多く挙げる。また, インタビューより『学び合い』実践者は子ども集団の有能性を実感し, 集団で課題解決を図ることの意義を感じていることが示唆された。

## III. 引用参考文献等

- 1) 文部科学省：「共生社会の形成に向けたインルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）概要」, 2012.
- 2) 文部科学省：「特別支援教育について-1. はじめに-」, 2009.
- 3) 文部科学省：「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」調査結果, 2012.
- 4) 会沢信彦, 曾山和彦編：「3ステップであんしん気になる子への対応術：個別・集団対応も保護者対応もグッとうまくいく支援」, p18-169, 教育開発研究所, 2008.
- 5) 國分康孝, 國分久子監修：「教室で気になる子」, pp. 37-193, 図書文化社, 2003.
- 6) 西川純：「資質・能力を最大限に引き出す! 『学び合い』の手引き アクティブな授業づくり改革編」, pp. 10-126, 明治図書, 2016.
- 7) 西川純：「気になる子の指導に悩むあなたへ」, pp. 27-41, 東洋館出版, 2008.
- 8) 西川純, 間波愛子：「『学び合い』で『気になる子』のいるクラスがうまくいく!」, pp. 122-127, 学陽書房, 2015.
- 9) 前掲 7), pp. 27-41.
- 10) 三崎隆, 戸井田未菜, 小松幹, 西川純, 桐生徹, 水落芳明：「理科授業における「気になる子」の『学び合い』の授業による変容に関する事例研究」臨床教科教育学会誌, 12(1), pp. 55-74, 2012.

指導 西川 純